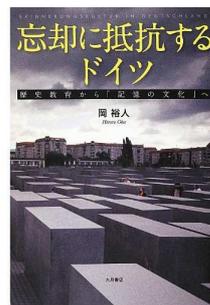


〈わたしの“おすすめコーナー”〉

『忘却に抵抗するドイツ』

—歴史教育から「記憶の文化」へ—

岡 裕人 大月書店 (2012/6/20) 1800円+税



ドイツと日本は戦争責任の取り方でよく比較される。戦争責任を認めて謝罪し補償をしたドイツと、なかなか認めようとしない日本。けれど、ドイツもそこに至るまでの道は平坦ではなかったという。

戦後のドイツには自分は戦争の被害者だとの認識を持つ人が多く、「時刻ゼロ」という言葉が使われた。「ナチ時代に起こったことは、ドイツの歴史上不幸な事故だった。その事故は1945年に終わり、新しくゼロから始まった」という意味で教科書にも載っていたという。あまりに残酷な事実と自分との関わりを直視したくないという心理が社会全体にあったのだろう。

それが大きく変わったのが、1968年。世界各国でベトナム反戦を訴えた学生運動が盛んになった年、学生を中心に戦後生まれの若い世代が、ナチスの過去を不問にしてきた親の世代を批判した。ワルシャワゲッソーの記念碑の前で跪き、哀悼の意を表した当時のブランド首相が新東方政策をとったことも大きかった。

そして1970年代から、歴史教育が大きく変わっていく。常に批判的に歴史を見ることが歴史教育のもっとも重要な目的の一つになっている。資料などを使って討論し、プレゼンテーションを行う授業の中では「説明する」のではなくて「いかに自分の言葉で話すか」ということを重視する。それが、「歴史を学ぶこと」が過去のことを学ぶのではなく、いまの自分とのかかわりを考えることになるのだろう。

本書は、ベルリンの壁崩壊の年に渡独し、20年以上ドイツで歴史学、歴史教育に携わってきた著者が、現地の学校や研究機関、講演会や朗読会に出かけて取材し、生まれたものだ。

ドイツの、あまりにも暗く辛い「記憶」を過去のものにとどめず、どのように伝え、共有し、育み、そして人類共通の「財産」として未来につないでいこうとしている試みが心に迫ってきた。

「記憶の文化」とは、「記憶」を個人のものとしてでなく、地域や国の人々が集団の記憶として共有し、例えば加害、被害など違う立場に立つものによる粘り強い対話によってさらに普遍的なものへと高めていくとくみそのものでもある。過ちを二度と繰り返さないために社会や政治にはたらきかける力をもてるよう、「記憶」を常にケアし、育み、表現し、さらに共有していく試行錯誤が続けられている。

その具体的な例としてドイツとポーランドの教科書をめぐる市民たちの実践が述べられている。両国の人々が時間をかけて和解をめざし人間として交流しながら議論を進めていく。日中韓三国で『未来を拓く歴史』という教科書が出され、同じようなとくみが民間で始まっている。お互いに本音で話し合い、時には譲り合いながら歴史教育を見直そうという取組みが今後も広がってほしいと思う。

日本では戦争の被害者性ばかりが語られるようにみえる。著者は「人間全体の存在を破滅に追いやる原爆投下。日本人たちだけでなく、強制連行された中国人や朝鮮人、それに戦争捕虜も被ばくした。被害ばかりでなく、加害に関わる記憶も長崎にはある」という。広島・長崎があるのに、「福島原発事故に対する日本人の反応に照らして考えてみると、今まで日本には『記憶の文化』が大きく成長しにくい伝統的状況があったといえるのではないだろうか・・・」

私は長く「中国残留邦人問題」に関わってきている。被害者として悲惨な経験を語るだけではなく、未来に向けて、なぜこのような問題が起こったのか、その根源が侵略にあったことを抜きにしては、この問題を次世代に伝えていく意味は半減するだろう。「記憶」を未来に生かすために私たちにできることは何だろう。
(加藤文子 会員)